



カンブルランが もたらしてくれたもの

岩下真好

オーケストラ芸術の世界最先端の姿をそのままの鮮度で日本に伝える——カンブルランが読売日本交響楽団の常任指揮者としてもたらした最大の成果はこれに尽きる。むろん、それは7年目を迎えた今もそのまま続いている。

欧州楽壇の 最前線での活躍

着任直前まで、カンブルランはザルツブルク音楽祭の指揮者陣の切り札的存在として活躍を続けていた。カラヤンが長年君臨してきた世界最高峰の音楽祭を、巨匠の没後、新しい理念で発展させてゆくことに挑戦していたジェラルド・モルティエ総監督の片腕として、毎夏、中心的な公演を担い、音楽界の話題を独占していた。1992年から10年間のこの時期に、カンブルランはオペラだけでも9演目を手がけている。モーツァルトの初期作品のほか

〈フィガロの結婚〉、ストラヴィンスキーの〈放蕩者の成り行き〉、ドビュッシーの〈ペレアスとメリザンド〉、ベルリオーズの〈ファウストの劫罰〉と〈トロイアの人々〉、ヤナーチェクの〈カーチャ・カバーノヴァ〉など。これらの新鮮な公演は今も強く心に残る。演出を担当したのもムスバハ、マルターラー、ウィルソン、グートら、オペラ舞台の最前線を切り拓く革新的な演出家ばかりだった。

カンブルランのヨーロッパ楽壇での目覚ましい活躍ぶりは、はるかにこれ以前、ブリュッセルのモネ歌劇場やフランクフルト歌劇場在任時代から知る

人ぞ知るものだった。また、バーデンバーデン&フライブルクSWR（南西ドイツ放送）響を率いての目覚ましい成果も、実演やCDで広く知れわたっていた。そうしたカンブルランが読響の常任指揮者に着任し、定期演奏会をはじめ数々のコンサートに登場することになったのだ。これによって日本の聴衆は、タイムラグなしに、今の現在進行形で生成しつつある最新のオーケストラ芸術を味わうことができるようになった。これは、まさに日本の音楽界にとって画期的な大事件と言うべきものであった。

個人的には、こんなに嬉しいことはなかった。それまで、演奏の新しい息吹を求めて時間や費用も顧みず追いかけてきた演奏家が、日本に定期的にやってきてくれることになったのだから。もちろん、これまでも興味深い演奏家が数多く来日して日本の舞台に立って演奏を披露してきてくれたが、それは、すでに一定の形にできあがったものを、いわばスタティックな形で示してくれるものであった。カンブルランの着任とともに、芸術上の時差が完全に吹き飛んだのだった。

音楽の明快さと透明性、 音色の鮮やかさ

カンブルランの魅力は、なによりも、その演奏の新鮮さにある。この曲

はこういう作品だといった既成観念から自由。カンブルランの手にかかると、聴き慣れた定評ある名曲も含めて、すべての作品がじつにみずみずしい姿で立ち現れる。毎回のコンサートがつねに新しい音楽体験への期待と緊張を呼び起こし、またそれが実際に満たされて、出会いと発見の興奮と深い充足感をもたらしてくれる。

新鮮さは、具体的には、つくり出される音楽の明快さと透明性となって現れる。曇りないクリアな造形、テンポとフレーズの関係の爽快なまでの絶妙さ、音色の濁らない美しさといった要素によって、それは構成されている。カンブルランの着任後、こうした観点でのオーケストラの総合力の質的向上にも目を見張るものがあり、今やカンブルランの指揮する読響は世界のオーケストラの先頭集団に位置を占める。

一方向に限定されない広いレパートリーに基づく新鮮でバラエティに富んだプログラムも、カンブルランの大きな魅力だ。切り札が一枚きりではないのだ。じっさいにカンブルランのプログラム構成には、キーワードと呼べるものが複数ある。

多彩なレパートリー

むろんひとつは、フランス出身ならではのフランスものだ。2006年12月

の初共演でもドビュッシーの〈海〉やメシアンの〈トゥーランガリラ交響曲〉を聴かせてくれたように、ベルリオーズ、フランク、ドビュッシー、ラヴェルからメシアン、デュティユーまで、フランス近・現代の作曲家の作品での名演奏はカンブルランの表看板だ。〈幻想交響曲〉や〈ダフニスとクロエ〉の鮮烈な演奏を思い出す人も多い



2015年3月には欧州公演ツアーを行った ©読響

だろう。これらの傍らに、さらにストラヴィンスキーがあり、ことに三大バレエ曲を振っては現代最高の解釈者のひとりだ。

これと並んで、カンブルランはドイツ・オーストリア系のレパートリーもまったく同様に得意とする。モーツァルトやベートーヴェンを指揮して、じつに新鮮な切り口の快演を聴かせてくれる。第九公演はもとより、交響曲第7番をメインとしたオール・ベートーヴェン・プロも忘れられない。モーツァルトの交響曲第29番と協奏交響曲をメンデルスゾーンの〈スコットランド〉と組み合わせた日も、新しい発見に満ちた出色のコンサートだった。そしてマーラーはもちろん、シェーンベルクもシューマンもワーグナーも得意としている。意外な選曲と思われたカンブルランのブルックナーを聴いて、目から鱗うろこの体験をした人も多いはずだ。

いっぽうカンブルランは、20世紀以

降の前衛的な作品のスペシャリストとしても知られている。この方面では、クラングフォーラム・ウィーンはじめヨーロッパの楽団との活躍が主だが、読響とも実績を積んでいる。バルトクからアイヴズ、ヴァレーズなどを取り上げているほか、ヨーロッパ遠征公演も含めて酒井健治の新作を紹介し、またツェンダーと細川俊夫の作品による定期演奏会でも強い印象を残した。

カンブルランは、このような広いレパートリーを背景に旺盛な芸術的好奇心と冒険精神を羽ばたかせて、じつに変化に富んだプログラムを組み立てて演奏会に臨む。その新鮮な発想力もたまらない魅力だ。フランスもの、ドイツものといった同系統の作品を考え尽くされたバランスで意味深くまとめてみせることもあれば、意外な組み合わせで私たちの固定観念に爽快な揺さぶりをかけてくれることも多々ある。最近では、ベルリオーズの序曲〈宗教裁

判官〉、デュティユーのチェロ協奏曲、ブルックナーの交響曲第3番を並べた今年6月の《定期演奏会》がそうだった。まさにカンブルランならではの、刺激的にして感銘もひとしおの一夜だった。これからも新鮮な演奏会が続くことは間違いない。

聴き逃せない今シーズン

カンブルランは今年2016年で常任指揮者に就任して7年目に入った。秋からのプログラムを見渡して、その魅力を吟味しておこう。10月と来年1月の二度の《定期演奏会》は、前者ではデュティユーの交響曲第2番が、後者ではメシアンの〈彼方の閃光〉が取り上げられる。

2016年はデュティユーの生誕100年にあたり、カンブルランはこれを見据えて、すでに2月に〈音色、空間、運動〉を、6月には名手ケラスを招いてチェロ協奏曲を聴かせてくれている。交響曲第2番は、記念の年の締めくくりとなる。〈ル・ドゥブル〉という副題をもつこの作品は、オーケストラのなかに複合的に小オーケストラを形成するという二重構造をもつ。緻密で凝ったつくりの音楽ながら、デュティユーらしい色彩感と純度の高い響きも欠かない。カンブルランには打ってつけの作品と言えるだろう。生誕100

年を飾るにふさわしい名演が待ち望まれる。ちなみに、この日は五嶋みどりのソロによるコルンゴルトのヴァイオリン協奏曲なども演奏されるグルメな一夜だ。

〈彼方の閃光〉は、メシアンの大作中で〈トゥーランガリラ交響曲〉に次ぐ人気のある曲だ。すでに〈トゥーランガリラ〉に2回も取り組み、ヨーロッパ・ツアーでも演奏して絶賛を博しているカンブルランと読響であれば、その演奏に好奇心と期待が高まるのは当然というもの。またもやメシアンの広やかな音楽宇宙にひたりきることになるだろう。聴きのがしてはなるまい。

《名曲シリーズ》も目が離せない。10月は、シューベルトの〈ロザムンデ〉の序曲と間奏曲のあいだにベルリオーズの歌曲〈夏の夜〉をはさみ、ベートーヴェンの第8交響曲で結ぶ、強く惹きつけられる個性的なプログラムだ。1月は、フランスもの特集で新国立劇場合唱団が共演する。このほか土曜と日曜の《マチネーシリーズ》や横浜では、カンブルランが全コンサートを指揮する“カンブルラン月間”の10月にシューベルトの〈グレイト〉があり、カンブルランがどのような切り口を見せるか興味津々だ。カンブルランにとって初めての《パルテノン名曲シリーズ》への出演もこの月だ。2月には、カンブルランとしては珍しい部類に入

るだけに気になるチャイコフスキー・プログラムもある。

空前絶後の大プロジェクト 〈アッシジの聖フランチェスコ〉

2017年には、まる7年の歳月をかけて関係を熟成させてきたカンブルランと読響が、メシアンの大傑作オペラ〈アッシジの聖フランチェスコ〉のコンサート形式上演に挑む。これは、今までに類例のない音楽上のひとつの大事件だ。それも日本ばかりか世界的に見ての大事件と言ってもけっして過言ではないだろう。じっさいに、これを聴きに外国からやって来る人たちがいても何ら不思議ではない。この巨大で深遠な作品が演奏されるということは、それほど貴重な機会なのだ。

なにしろ、3幕8場からなる全編が休憩時間を含めない正味で4時間を優に超える超大作だ。主役の聖フランチェスコをはじめ、このオペラのそれぞれの役について、その演唱に習熟している歌手たちをそろえるのは容易なことではない。そしてなによりも、作品の音楽的特質と理念を完璧に把握して上演全体を導いてまとめ上げられる指揮者が容易には得られない。ところが今回は、メシアンの音楽を知り尽くし、しかも、この作品も含めてオペラの指揮にも膨大な経験を誇る（指揮

したオペラは50作品を下るまい！）カンブルランが、最も親密なオーケストラである読響を指揮して演奏に臨むのだから、これはもう万全である。優秀な歌手たちが集まることも必至だ。

すでにカンブルランは、〈アッシジの聖フランチェスコ〉をパリ・オペラ座のバステュー劇場はじめ、マドリッド王立劇場やルール・トリエンナーレ音楽祭などで手がけて大成功を博している。筆者は後者を鑑賞することができたが、通常の意味での演出をほどこさず、照明によって変化する抽象的なオブジェを背景に劇を進行させるというシンプルな舞台だった。だがかえってそれが、カンブルランのセンシブルで集中力の高い指揮と歌手たちの熱演とを得て、きわめて凝縮度の高いオペラ世界を現出させていた。カンブルランも、シンプルな上演方法は十分に経験済みなのである。コンサート形式でも、このオペラの魅力の核心に触れ



2011年マドリッド王立劇場での〈アッシジ〉公演 ©Javier de Real

ることができるだろう。

人間が持つ清らかな美しさ へのオマージュ

オペラは、聖者フランチェスコの生涯をストーリーとして描くものではない。父親との確執^{かくしつ}、世俗的な生活からの回心、聖女キアラとの清らかな結び合いなど、この聖者をめぐる有名なエピソードはまったく扱っていない。メシアンが描こうとしたのは、聖者となったフランチェスコの聖なる在り方そのものだ。人間としてのその感動的な美しさだ。熱心なクリスチャンであったメシアンは、もちろんそれをキリスト教信仰がもたらす真実の証しとして賛美と称賛の心をもって描いたのであったが、このフランチェスコの姿は、人間がもつ美しく清らかで崇高な面へのオマージュという意味で、さらに広

い普遍性を獲得している。

メシアンがこのオペラの各場面につけたタイトル、たとえば“音楽家である天使”“鳥たちへの説教”“死と新しい生命”といった言葉には、人間と世界を取り囲む美しいもの、清らかなものに目を向け、それを讃えようというメシアンがこのオペラに託した思いを読み取ることができるだろう。

〈アッシジの聖フランチェスコ〉というオペラは、個々の場面がトルソとしてもたらず感動を延々と長大な時間のなかで八つも重ね合わせて、ついには永遠そのものを実感させる。まったく特別な意味での稀有^{けう}の感動的オペラなのである。この音たち、この歌たちに耳を洗われると、世界への見方が少しだけ変わるかもしれない。

(いわした まさよし／ドイツ文学者、
音楽評論家、慶應義塾大学名誉教授)

◆〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演情報◆

2017年11月19日(日) 第572回定期演奏会 会場：サントリーホール
11月23日(木・祝) 会場：びわ湖ホール
11月26日(日) 第606回名曲シリーズ 会場：サントリーホール

指揮＝シルヴァン・カンブルラン

独唱＝調整中(天使／ソプラノ)、ヴァンサン・ル・テクシエ(聖フランチェスコ／バリトン)、ペーター・ブロンダー(重い皮膚病を患う人／テノール)、フィリップ・スライ(兄弟レオーネ／バリトン)、エド・ライオン(兄弟マッセオ／テノール)、ジャン＝ノエル・ブリアン(兄弟エリア／テノール)、妻屋秀和(兄弟ベルナルド／バス)ほか

合唱＝新国立劇場合唱団、びわ湖ホール声楽アンサンブル(合唱指揮＝富平恭平)
メシアン／歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉(演奏会形式・全曲日本初演)

心に残るクラシック

篠田節子 ②

Setsuko Shinoda

多勢に無勢

エルガー：チェロ協奏曲



ずいぶん前のことになるが、『ほんとうのジャクリーヌ・デュ・プレ』という映画を見た。病によって若くして引退した天才チェリストの悲劇を扱った作品で、原作は姉のヒラリー・デュ・プレと弟のピアス・デュ・プレによる共著『風のジャクリーヌ』である。ただし「悲劇」の内容が、病による演奏活動の断念ではなく、よりプライベートでスキャンダラスなものであったために、様々物議をかました。映画化されたアナンド・タッカー監督の『ほんとうのジャクリーヌ・デュ・プレ』の方も、関係した演奏家たちから抗議を受けた、と聞いている。

音楽関係者ではないが、私自身もさる女性誌でタッカー監督と対談したおり、創作と人の幸福について「世界中があなたを拍手で迎えてくれたとしても、あなたを温めてはくれない」という言葉を引いて、監督がデュ・プレが女性として決して幸福ではなく、「幸

せの秘訣は抱きしめてくれないものを創造するより抱きしめてくれる子供を作ること」と冗談めかして語られたとき、大いに反発した。

ちっぽけな幸福論を超え、天才的な創作者も音楽家も、時間や空間、個人の死や倫理観をも超え、多くの人々と繋がり、絶望の淵ふちにいる人に手を差し伸べてくれるものではないか、と思えたからだ。

映画の制作意図はともかくとして、その中に登場するデュ・プレの音楽は実に感銘深いものだった。とりわけデュ・プレがエルガーの協奏曲を弾くシーンは印象的で、美しい女優さんがなんと劇的なモーションで演じてみせた。あんな風に弾いてみようか、と当時、仲間内で真似して笑いあったものだが、実は、このエミリー・ワトソンという女優さんの演技はただの外連味けれんみというわけではない。デュ・プレのスタイルをかなり忠実に模したものだ。デュ・プレ本人のビデオを見ても、全



ジャクリーヌ・デュ・プレ (1945~87) ©Warner Classics

身を使った激しいボウイングでこの曲を弾いている。それにしても人生の黄昏たそがれを迎えた作曲家の憂愁を、若い女性チェリストがなぜあれほど胸に迫る形で表現できたのか。

そもそも協奏曲と言えば、ヴィルトゥオーソが技巧を凝らしたソロを弾く、というイメージがあるが、ちっちゃい子が八分の一とか、四分の一とかの楽器を抱えて発表会に臨み、はらはらしている親をよそに、案外、堂々と弾いてみせたりする、そんな学生のための協奏曲も存在する。たとえばザイツ、たとえばゴルターマンの。私などはいい歳をしてそうしたエチュード・コンチェルトに悪戦苦闘している一人だが、近眼と老眼の進んだ目をかっと思開き

楽譜に食らいついていると、先生から容赦のない声が飛ぶ。「音、小さい！ ソナタを弾いとるつもりか」「スケールの小さい演奏でまとめたら協奏曲にならん！」

協奏曲の相手はピアノではなく、最少でも五十台近い楽器で構成されるオーケストラなのだ。埋もれないような音量と、めりはりをつけた大きな表現が要求される。そんな当たり前のことに、巨匠たちの演奏による名曲を聴いて悦に入っている間は気づかなかった。だが、多勢に無勢、金管まで入ったオーケストラなんて暴力だろ、とは言わないが、それにしてもそんな大集団と、たった一人、しかもピアノならまだしも弦楽器一台で協奏し、共奏し、競争しなければならない。そんな無茶な……。

ひょっとすると、あの体を揺らし、のけぞって弾いていたデュ・プレの姿はパワフルとはいえ女の体力で、構造的に大音量にはなりにくいチェロという楽器を手にも大オーケストラを向こうに回し、おじさん作曲家の晩年の名曲を弾き切るための必然的なスタイルだったのではないか。私にとってのエルガーの協奏曲はフルニエでもカザルスでもない。デュ・プレに尽きる。限界を超えたところに花開いた壮絶な美しさに、心惹かれるのかも知れない。

◎首席トランペット奏者

辻本憲一

Kenichi Tsujimoto

シンフォニックで美しい
読響サウンドに貢献したい

「読売日本交響楽団に8月入団したばかりのニューフェイス。とはいえ、これまで東京フィルハーモニーの首席をつとめてきたスタープレイヤーだ」

大学4年生の時、東京フィルに入団して以来17年間、演奏してきました。東京フィルではオペラ、交響曲のほかに、青少年のためのコンサートや映画、ミュージカル、ポップス、ゲームなど様々なジャンルの音楽を演奏することができ、とても充実した時間でした。そんな中で今一度クラシック音楽に重点を置いて、十分な時間をかけて取り組みたいと考えていたところ、読響のオーディションがありました。読響には仲の良い友達もおり、良い音楽環境でとても心地よいです。

「一緒に演奏してみて読響サウンドはいかがですか」

東京フィルは、オペラを中心としたスタイルで、ダイレクトにドラマに合わせて感情や風景を描写するので、表現の幅が広く、それはアンサンブルで

もとてもはっきりしていました。読響は、シンフォニックな美しいサウンドで、ホールに響き渡るような印象です。頭の中は、徐々に切り替わってきていますが、これからも読響のサウンドを守りつつ、読響でしか聴けないサウンドを作っていきたいです。

「辻本さんは大阪出身。中学校の吹奏楽部でトランペットを始めてたちまち頭角を現し、芸大へ進んだ。大学3年生の時に日本音楽コンクール、日本管打楽器コンクールでいずれも2位に輝いた」

実は小学校のころは音楽の成績が悪かったのです。中学校に入った時に音楽の先生に相談したところ、先生は吹奏楽部を勧めて下さいました。僕の唇を見るなりトランペットに向いていると、トランペットのパートにしてくれたのです。中高一貫教育校だったので6年間かけてゆっくりと成長していけたと思います。

高校1年生の時、アンサンブル・コンテストの全国大会で金賞をいただいたのはとてもいい思い出です。一緒に参加した尊敬する先輩が東京芸術大学に進まれたので、僕も目指しました。両親には簡単に賛成してもらえませんが、かえってそのことが、音楽



の道に進むことの厳しさを僕に教えてくれたように思います。芸大では、はたして音楽で生活できるのだろうかと不安でしたが、コンクールやオーディションを経て、プロの音楽家としてのスタートを切ることができました。

「オーケストラでのトランペット演奏の楽しみとは」

吹いていてとても気持ちが良いんです。それがやっぱりすごく楽しい。金管楽器は声楽と同じように、身体の一部を振動させて音を出します。声楽だと声帯、金管だとそれは唇ということになります。金管楽器奏者でハーモニーを演奏する時は何ものにも代えがたい充実感があります。ハーモニーの心

地よさを大切に、それがお客様に伝わるようにしていきたいと思っています。オーケストラでトランペットを演奏するには独特のテクニックが必要です。たとえば弦楽器とタイミングを合わせることや、ティンパニとアーティキュレーションを合わせることなど色々ありますが、それらが一体となった時はオーケストラの奏者として最も幸せな瞬間です。

「トランペットはよく難しい楽器だとも言われますね」

トランペットは昔から「王の楽器」として曲の中でも大変重要なところで使われてきました。しかし、けっして楽には音が出ない楽器です。自分の身体を振動させて音を出すので、健康や精神の状態にも大きく左右され、そのコントロールが非常に難しい。ただ一つ言えるのは、頭の中を常に音楽でいっぱいにすることが大切だと思っています。僕が高校生の時、声楽の先生に「辻本君、君は演奏家ではなく音楽家になるんだよ」とよく言われました。この言葉はずっと僕の中で深く刻まれ、歳をとるごとに重みを増しています。

読響のお客様には生の音楽の素晴らしさを感じていただきたいし、私たちにしかできない音楽を届けていきたいと思っています。

11月 公演の聴きどころ

小林研一郎による《入魂のブラームス》。巨匠デームスが登場!

11/24 (木) 19:00 第564回 定期演奏会
サントリーホール

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番 ブラームス：交響曲 第4番
指揮：小林研一郎（特別客演指揮者） ピアノ：イェルク・デームス



小林研一郎

“炎のコバケン”が得意のチャイコフスキー作品で渾身のタクト!

12/2 (金) 19:00 第598回 名曲シリーズ
サントリーホール

12/3 (土) 15:00 第4回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番、交響曲 第4番
指揮：小林研一郎（特別客演指揮者） ピアノ：松田華音



松田華音

24日の《定期演奏会》には、読響特別客演指揮者の小林研一郎が登場し、ブラームスの交響曲第4番を披露する。読響と小林は2014年4月から、ブラームスの交響曲全集の録音に取り組んでいる。昨年CDリリースされた交響曲第3番は『レコード芸術』誌で特選盤に選ばれるなど絶賛を博しており、今回の交響曲第4番にも期待が高まる。晩年のブラームスらしい憂愁と枯淡の境地を、重く厚いサウンドで響かせるだろう。前半のベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番では、87歳の巨匠デームスを迎える。かつて「ウィーン三羽鳥^{さんばがらす}」に数えられ、本場の伝統を受け継ぐ長老ピアニストが、味わい深い音楽を紡ぐ。

12月2日の《名曲シリーズ》、3日の《パルテノン名曲シリーズ》では、小林研一郎がオール・チャイコフスキー・プログラムで本領を發揮する。ピアノ協奏曲第1番のソロは、ロシアで学ぶ新星・松田華音。最もポピュラーなピアノ協奏曲の一つで、超絶技巧が随所に盛り込まれた名品を壮大に奏でる。力強いファンファーレと民俗的なリズム、哀愁漂う旋律で人気の交響曲第4番では、“炎のマエストロ”コバケンが情熱たぎる力強いリードを聴かせるだろう。

(文責：事務局)

カエターニが振るロシア音楽。鬼才ポゴレリッチが注目の共演!

12/13 (火) 19:00 第565回 定期演奏会
サントリーホール

ムソルグスキー（ショスタコーヴィチ編）：歌劇〈ホヴァンシチナ〉から
“ペルシャの女奴隷たちの踊り”

ボロディン：交響曲 第2番
ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番
指揮：オレグ・カエターニ
ピアノ：イーヴォ・ポゴレリッチ



オレグ・カエターニ



イーヴォ・ポゴレリッチ

ドイツの名匠シュテンツが〈第九〉を指揮。年末に響く“歓喜の歌”

12/17 (土) 14:00 第193回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/18 (日) 14:00 第92回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

12/20 (火) 19:00 FUJITSU Presents Concert
〈第九〉特別演奏会 サントリーホール

12/21 (水) 19:00 第599回 名曲シリーズ
サントリーホール

12/22 (木) 19:00 第15回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪)

12/25 (日) 14:00 第193回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/26 (月) 19:00 〈第九〉特別演奏会
東京オペラシティコンサートホール

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉
※12月20日公演はベートーヴェンの〈エグモント〉序曲も演奏します。

指揮：マルクス・シュテンツ
ソプラノ：アガ・ミコライ
メゾ・ソプラノ：清水華澄
テノール：デイヴィッド・バット・フィリップ
バス：妻屋秀和
合唱：新国立劇場合唱団
合唱指揮：三澤洋史



マルクス・シュテンツ



アガ・ミコライ



清水華澄



デイヴィッド・バット・フィリップ



妻屋秀和

カンブルランが、よみうり大手町ホールに初登場!

1/20 (金) 19:30 第13回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《カンブルラン指揮の小編成オーケストラ》

ロッシーニ：歌劇《セビリアの理髪師》序曲

ウェーバー：クラリネット協奏曲 第2番

モーツァルト：交響曲 第40番

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

クラリネット：藤井洋子（読響首席）



シルヴァン・カンブルラン



藤井洋子

シリーズ600回目を記念する《極上のフランス音楽》

1/25 (水) 19:00 第600回 名曲シリーズ
サントリーホール

デュカス：舞踊詩《ラ・ベリ》

ドビュッシー：夜想曲

ショーンソン：交響曲

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

女声合唱：新国立劇場合唱団



シルヴァン・カンブルラン

約130人の超巨大編成による傑作を、遂に読響で!

1/31 (火) 19:00 第566回 定期演奏会
サントリーホール

メシアン：彼方の閃光

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）



シルヴァン・カンブルラン

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390

(10:00~18:00/年中無休)

ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

NISSAY OPERA 2016 〈後宮からの逃走〉

■ 11/11 (金) 18:30、11/12 (土) 14:00、11/13 (日) 14:00 日生劇場

指揮：川瀬賢太郎 演出：田尾下哲

出演：森谷真理、鈴木玲奈、宍戸開、鈴木准 ほか（11日、13日）

佐藤優子、湯浅ももこ、宍戸開、金山京介 ほか（12日）

モーツァルト／歌劇〈後宮からの逃走〉

（全3幕／ドイツ語歌唱・日本語台詞・日本語字幕付）

[料金] S ¥9,000 A ¥7,000 B ¥5,000

[お問い合わせ] 日生劇場 03-3503-3111

武蔵野合唱団第49回定期演奏会

■ 11/19 (土) 17:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：下野竜也 ソプラノ：小林沙羅、佐藤優子 アルト：平山莉奈

バリトン：青山貴 合唱：武蔵野合唱団

ヴィヴァルディ／〈グローリア〉 ウォルトン／オラトリオ〈ベルシャザールの饗宴〉

[料金] S ¥5,000 A ¥4,000 B ¥3,000 ヤングシート ¥500

[お問い合わせ] 武蔵野合唱団 080-4811-4866

伊豆市グリーンコンサート2016

■ 11/20 (日) 16:00 伊豆の国市長岡総合会館アクシスカつらぎ

指揮：小林研一郎 ピアノ：小林亜矢乃

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲 ラフマニノフ／ピアノ協奏曲 第2番

ドヴォルザーク／交響曲 第9番〈新世界から〉

[料金] 一般 ¥4,000 高校生以下 ¥2,000（伊豆市民は表示価格の半額）

[お問い合わせ] 伊豆市社会教育課 0558-83-5476

宮崎陽江ヴァイオリン協奏曲の夕べ

■ 11/28 (月) 19:00 東京オペラシティコンサートホール

指揮：大友直人 ヴァイオリン：宮崎陽江

《オール・ベートーヴェン・プログラム》

〈プロメテウスの創造物〉序曲、ヴァイオリン協奏曲、交響曲 第7番

[料金] S ¥6,000 A ¥5,000 B ¥4,000 学生 ¥2,000

[お問い合わせ] コンサートイマジン 03-3235-3777